

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和2年度－

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

目次

1. 外部評価委員会評価結果	1
2. 外部評価委員会評価報告	
総会	2
博物館部会	10
研究所・センター部会	14
3. 外部評価委員会委員名簿	
博物館部会	21
研究所・センター部会	22

令和2年度 独立行政法人国立文化財機構自己点検評価に対する外部評価委員会評価結果

中期目標大項目	中項目	小項目	自己点検評価	部会評価	総会評価	業務の まとめ
Ⅰ. 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信	(1)有形文化財の収集・保管、次世代への継承	B	B	B	博物館
				名児耶 B 河合 B 浜田 B 小笠原 B 小松 B 坂本 B 榊原 B 名児耶 B 出川 B 寺崎 B		
		(2)展覧事業	B	B	B	
				名児耶 B 河合 B 浜田 B 小笠原 B 小松 B 坂本 B 榊原 B 名児耶 B 出川 B 寺崎 B		
		(3)教育・普及活動	B	B	B	
				名児耶 B 河合 B 浜田 B 小笠原 B 小松 B 坂本 B 榊原 B 名児耶 B 出川 B 寺崎 B		
		(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究	B	B	B	
				名児耶 A 河合 A 浜田 B 小笠原 B 小松 B 坂本 B 榊原 B 名児耶 A 出川 B 寺崎 B		
		(5)国内外の博物館活動への寄与	B	B	B	
				名児耶 B 河合 B 浜田 B 小笠原 B 小松 B 坂本 B 榊原 B 名児耶 B 出川 B 寺崎 B		
	2. 文化財及び海外の文化遺産保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施	(1)新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究	B	B	B	研究所・センター
				寺崎 B 河合 A 齋藤 B 小笠原 B 児島 A 坂本 B 寺田 B 名児耶 B 柳林 A 寺崎 B		
		(2)科学技術を応用した研究開発の進展に向けた基盤的な研究	A	A	A	
				寺崎 A 河合 A 齋藤 A 小笠原 A 児島 A 坂本 B 寺田 A 名児耶 A 柳林 A 寺崎 A		
		(3)文化遺産保護に関する国際協働	B	B	B	
				寺崎 B 河合 B 齋藤 A 小笠原 B 児島 B 坂本 B 寺田 A 名児耶 B 柳林 B 寺崎 B		
		(4)文化財に関する情報資料の収集・整備に関する調査研究成果の公開・活用	A	A	A	
				寺崎 A 河合 A 齋藤 A 小笠原 A 児島 A 坂本 B 寺田 A 名児耶 A 柳林 A 寺崎 A		
		(5)地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等	B	B	B	
				寺崎 B 河合 B 齋藤 B 小笠原 B 児島 B 坂本 B 寺田 B 名児耶 B 柳林 B 寺崎 B		
Ⅱ. 業務運営の効率化に関する事項			B	—	B	法人共通
					河合 B 小笠原 B 坂本 B 名児耶 B 寺崎 B	
Ⅲ. 財務内容の改善に関する事項			B	—	B	
					河合 B 小笠原 B 坂本 B 名児耶 B 寺崎 B	
Ⅳ. 予算、収支計画及び資金計画			B	—	B	
					河合 B 小笠原 B 坂本 B 名児耶 B 寺崎 B	
Ⅴ. その他事項			B	—	B	
					河合 B 小笠原 B 坂本 B 名児耶 B 寺崎 B	

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和2年度－

総会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（総会）

まとめ

機構全体評価へのコメント	
河合委員長	新型コロナウイルス感染症の広がりによって当年度は、ほとんどあらゆる業種において活動に制約がかかり、当初計画通りの実施が困難であったと思う。その制約や不測の事態の発生があったこと等を踏まえ、正常時とは些か異なる基準を立て、外部評価もしなくてはならないであろう。以下、わたしはその考えに基づき、出来るだけ公平正当な、外部評価委員としての評価を行うことに務めた。
小笠原委員	新型コロナウイルスの影響の直撃を受けた1年であったといえる。しかしこうした時こそ文化が殺伐とした国民の気分を癒し、明日への希望や活力を生む源泉になるものである。そうしたなかにおいては、将来への連続性を有した活動を行った1年でもあることを高く評価したい。ワクチン接種による正常化を早く期待したいが、それまでの間の展示活動を含む当機構のさらなる創意工夫に期待していきたい。
坂本委員	新型コロナウイルスの感染が広がり、幾度もの緊急事態宣言が発出されて対応に苦慮する1年となったが、いずれの博物館、研究所、センターとも、制約のなかで最大限の努力と挑戦を重ねてこられた。文化を守る使命を全うされたことに心より敬意を表する。
名児耶委員 （博物館部会長） ※以降同じ	稀に見る困難な状況下にもかかわらず、調査研究とその成果を展示と結びつける活動などで健闘していたと思われる。特別展も重要ではあるが、通常の文化財の研究とその成果をひろく知らしめること、通常展が基本的な重要な活動であることを考えさせられた一年であったと思う。
寺崎委員 （研究所・センター部会長） ※以降同じ	全世界に及ぶ新型コロナウイルスの蔓延という未曾有の事態をむかえ、各機関ともにその対応に追われる困難な1年となった。そうした中で、それぞれの立場で、今なすべきこと・出来ることと出来ないことを決断し、必死の努力を重ねていることに、敬意を表したい。 こうした状況下での評価は難しいものの、全体としては所期の目標を達成していると考えられる。

〔博物館業務〕		
1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	収集・保管に対しては各館の努力によって一定の成果を上げていると評価出来る。作品の収集の充実、博物館活動等に多彩・多様さをもたらすことは、言うをまたないが、それには部会委員の発言にもあるように、資料購入の予算的裏付けが不可欠である。と、同時に、購入に一定の限界があるのであれば、これを補完する意味での上質な作品の寄贈や寄託に努める必要がある。なお、各館とも文化財の保存修理には評価すべき実績を上げていると言ってよい。
小笠原委員	B	コロナ禍のなかでは活動がおおいに制限されたものと推察する。そうしたなかで、収集、寄贈は大変だったかと思うが、東博での活動は特筆すべきものと思料する。
坂本委員	B	有形文化財の収集や受入れが停滞することなく進捗していると知って安堵した。寄贈者へのサポートも行われているとのこと。貴重な作品の数々を国民の共有の財産として受け継いでいただきたい。
名児耶委員	B	購入品、寄託品は、着実に増加、毎年少しずつでも収集していることが評価できる。修理、保存活動にも成果を上げていると認められる。別に意見があるように、確かに収蔵庫等の保管場所対策も必要となるだろう。
寺崎委員	B	着実かつ適切に運営されていると認められる。

(2) 展覧事業		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	「きもの KIMONO」(東博)「聖地をたずねて」(京博)「よみがえる正倉院宝物」(奈良博)「中宮寺の国宝」(九博)等は、展示の目指すところおよび企画の内容、その事前準備状況(調査研究)などから評価すべきと判断される。入場者目標には達していないが問題とすべきでない。なお、予約制が取られていたが、予約制の導入等に関しては、方法や広報等を含め、今後引き続き検討課題としてほしい。
小笠原委員	B	入館者数が目標数値を大きく下回ったのは、新型コロナウイルスの影響を通年にわたって、受けたものであり、中止した展示も多々あり、やむを得ないとする。こうした状況下で「きもの KIMONO」や「皇室の名宝」などは大変充実した特別展であったと評価する。
坂本委員	B	特別展の中止や入館者数の制限など困難に見舞われたが、来場者アンケートの満足度の高さが示すように、機構の活動は不要不急ではなく、必要不可欠。状況に合わせて工夫をしながらも、臆せず取り組み続けることを強く要望する。
名児耶委員	B	コロナによる様々な影響下においても健闘している。東博「きもの展」や京博「皇室の名宝」等のような展示は、日本文化を広く認知させる試みとして良いと思う。
寺崎委員	B	各館とも、様々な特別展・企画展示を準備したにもかかわらず、コロナ禍により縮小・中止が強いられたことは、担当者にとってきわめて残念なことであつたろうと推察する。例年に比べて拝観する機会が減ったが、その中で印象に残ったものとして、特別展「皇室の名宝」(京博)、特集「国宝『日本書紀』と東アジアの古典籍」(同)、「帝国奈良博物館の誕生」(奈良博)があつた。今後は、コロナ後を見すえた上で、引き続き平常展の充実を望みたい。なお、入館料の値上げや事前予約制の是非についての来館者の反応なども気になるところである。

(3) 教育・普及活動		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	各館ともいわゆる新型コロナの影響のもとで、それぞれに工夫を凝らし、一定の成果を上げたものと評価したい。オンラインの活用、ウェブサイトによる情報発信等については、日本全国の美術館・博物館が取り組むことになったが、独法各館においても今後引き続き、ナショナルセンターとして、その活用に関して研究してほしい。
小笠原委員	B	リアルな活動が制限される中、ウェブサイトからの情報発信やオンラインによる研修等で今後も成長していただきたい。
坂本委員	B	SNSの活用が拡大している点を評価する。私も登録して、楽しませていただいている。とはいえ十数万人のフォロワーを持つ小規模民間美術館も存在する。さらに魅力的なコンテンツ発信でファン層の拡大をお願いしたい。
名児耶委員	B	コロナの影響で、教育、普及活動はより困難な中で、新しい工夫での対応でまずまずの成果をあげていたと判断できる。
寺崎委員	B	この活動においてもコロナ禍の困難な状況において、オンラインの活用や、動画配信といった形で、成果を挙げていると評価される。

(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント

河合委員長	A	博物館事業として、今後重要視されるのは、特に教育普及活動であると愚考するところである。名児耶博物館部会長が指摘するように、研究成果の公開と展示活動の充実に評価すべきところが多く、今後博物館活動の中心となり、これが維持されることに期待を込めて小職もA評価を与えたい。
小笠原委員	B	各活動においても制約されている中での工夫が多くみられる。中でも奈良や九州でのA評価事業については、非常に充実した活動であったことが評価できる。
坂本委員	B	オンラインシステムを使った取り組みやインクルーシブデザインの導入など新しい取り組みも見られて、今後への可能性を感じる。
名児耶委員	A	全体に研究成果の公開と展示活動が充実しはじめていと感じられされ、評価して良いと思う。こうした活動が継続されることを望み、博物館活動の中心となるべく維持されることが期待したい。
寺崎委員	B	担当諸氏による調査研究が十分になされ、その成果が報告書・紀要等に反映されていると考える。

(5) 国内外の博物館活動への寄与		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	当年度は、非常に活動の難しい状況にあったことは自明である。榊原委員の指摘のように、作品、それも芸術的・歴史的に優れた優品を、実際に自らの眼で見ることに触れることこそが、その理解に繋がり、高い教育的効果を上げる最短の道と言える。国内外への出前展の活発化が期待される。その実施にあたっては、企画がいわゆるお仕着せのものではなく、当該開催館の希望や企画内容を反映するものであることに留意して欲しい。
小笠原委員	B	一番制約の影響を受けた分野であると思われる、これ以上のコメントは差し控える。
坂本委員	B	海外関係を中心に延期や中止された計画は多かったが、国内貸与など先方と協議しつつ丁寧に丹念に取り組んでいる。
名児耶委員	B	困難な状況下では海外での活動は難しかったとは思われるが、目標の成果はあげたと思われる。
寺崎委員	B	人の移動が極端に制約された中で、方法を工夫することによって、所期の目的を達成したと判断される。

〔研究所・センター業務〕		
2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	A	各委員が指摘するように、コロナ禍にあってしかなし得ない調査や研究がなされたことは十分に評価されて然るべきである。その成果の公表や報告書等の発行は、今後の、研究やパンデミック対応のための資料として大きな礎としての役割を果たすものである。
小笠原委員	B	無形文化財の継承は、対面によって得られることが大きいと推察され、この制約下では、非常に大変なことであったと思う。
坂本委員	B	海外とのやりとりが抑制されるなか、デジタルデータの公開や充実が順調に実現できており、また発掘調査なども進められており、研究が継続できていることを評価する。
名児耶委員	B	委員の多くが感じていると思うが、コロナ禍の中でも調査研究を地道に実施、着実に目標を達成していると判断できる。
寺崎委員	B	東文研による、無形文化財へのコロナの影響を調査し、対応策などの情報発信を行い、その報告書を刊行したことは、時宜を得たものと評価される。

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	A	各委員の評価を、適切なものと小職も判断するものである。科学技術を応用した研究の開発については、当研究所・センターがその主導を担うものと思えるが、その実行を裏付けるための資金面での支援が不可欠であることもここに付言して置かなくてはならない。
小笠原委員	A	最新の科学技術を駆使した要素材料や作業着法の開発行為といった新規性に富む活動は、自己評価、部会評価と同様に高く評価したい。
坂本委員	B	調査研究手法の多様さや、その研究成果の多彩さは興味深い。たとえば三次元印刷による解明や、遺構の保存環境にかかわる実験など、ニュース性も高い。
名児耶委員	A	調査研究の目標の成果を発表することにより、多くの文化財関係者に有益となる情報を提供する状態を作り出すなど、十分な成果をあげている。それぞれの研究は、目標以上の結果があると評価できる。
寺崎委員	A	文化財の修復・保存等に科学的な手法を応用する分野は、東文研・奈文研が最先端に行くが、今年度も十分な成果をあげたと認められる。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	オンラインでの国際間の交流や協力には、自ずから、ある種の限界があることも否めない。しかし、こうした困難ななかであって、なお果敢な取り組みをなしていることは評価されよう。小人数、不十分な予算で懸命に事業を展開していることにエールを送りたいとする委員の意見も小職には見逃せない。
小笠原委員	B	昨年はA評価であったが、さすがにコロナ禍のなか、思うように活動できなかったことは残念である。
坂本委員	B	ほとんどがオンラインに切り替える形での協働となったが、アフターコロナに向けて連携を深めていただけるよう期待する。
名児耶委員	B	コロナ禍の中で海外と関わる予定の活動は、かなり制限される中、オンラインの活用や冊子の発行等から判断して、健闘していたとして良い。
寺崎委員	B	海外との往来が制限されたため、オンライン方式での対応が主となった。その成果は認められるものの、プロジェクト毎の評価を積み上げると、B評価が妥当であろう。

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価 A 委員評価 A		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	A	東京文化財研究所の基幹事業に位置づける考えを持つ小職は、文化財情報資料部の「売立目録デジタルアーカイブ」の公開と研究報告書「売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望」の出版を、未開拓かつ美術史研究における基礎的資料の集積の取り組みとして、これを高く評価する。また特集展示「日本美術の記録と評価」は、京都工芸繊維大学、東京国立博物館との研究協力に基づく調査研究の成果を公にするものであり、他機関との良好な連携関係を構築したことも併せて評価したい。
小笠原委員	A	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充、文化財のデータベースの充実、図書の収拾、整理、公開、提供などの活動では、オンライン環境を整え、オンラインでのアウトプットに成果があったことを評価したい。
坂本委員	B	ウェブサイトが有効に機能している。セキュリティには十分に注意しつつも、さらに公開と活用を推進してほしい。
名児耶委員	A	情報資料に関する活動は、比較的コロナ禍の影響は少ないこともあるのか、研究成果の発表などの多さからして、目標以上に健闘していると判断できる。

寺崎委員	A	東文研の売立目録デジタルアーカイブの公開、奈文研の文化財情報データベースの充実など、情報発信の面では顕著な成果が見られた。
------	---	---

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	各機関とも、オンラインや動画発信等を活用することで、当初の目標を達成しているものと認められる。一方、コロナ禍によって、感染予防策等にも目が向けられるところになり、防災等を含めた、地方公共団体等を対象として、いわゆる災害対策、危機管理に対する研修や協力の必要性が求められることに気付かされよう。文化財防災センターの適切な活動に期待したい。
小笠原委員	B	天災（地震、風水害等）対応と違い、感染予防対策については、より連携をとっての継続的な対応の備えが必要になるものと考ええる。
坂本委員	B	中止になったプロジェクトも多い一方で、感染予防策を講じながらタイミングよく実施できた事業協力もあった。今年度も厳しいスタートとなっているが、状況を見ながら根気よく取り組んでいただきたい。
名児耶委員	B	現状では、積極的に出向いた活動はできない状況下でありながら、目標を達成していると判断できる。
寺崎委員	B	文化財防災センターが奈文研に設置され、今後、地方公共団体への助言等でも機能を発揮することが期待される。

〔法人共通業務〕

Ⅱ 業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	当年度の当初目標はほぼ達成されたものとみなされる。共同調達等の取り組みについては引き続きその推進を図ること望まれ、外部委託も継続して実施されるものと思うが、コンプライアンスの観点からの業務上の管理にも配慮が必要であろう。時代の趨勢からすれば業務の電子化は推進、強化すべきと考える。
小笠原委員	B	人事給与統合システムが期首から導入され、また人件費のシミュレーションを同システムで可能になるなど、より精度の高い人件費管理が行われている。また契約・調達方法の適正化及び共同調達は、前年度同様に合理的な運用を行っている。今後は情報セキュリティの配慮を行いながら、より有効な広域ネットワークの刷新や事務の一元化をお願いしたい。
坂本委員	B	計画通りの取り組みが行われている。
名児耶委員	B	さまざまな活動（業務改善・自己収入拡大ほか）で、目標にむかつて少しずつ努力していることが確認できる。
寺崎委員	B	—

Ⅲ 財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	当初の目標は達成されていると思う。引き続き、寄付金、科学研究費助成金、学術研究助成基金等の外部資金の獲得に努めるとともに、保有資産の有効活用に努める必要がある。なお、寄付行為に対する税制上の優遇についても引き続き行政担当部署との交渉を進めて欲しい。
小笠原委員	B	展覧会による自己収入が未達なのはやむを得ないところである。海外の博物館運営なども参考に入れて、機動的でかつ効果的な運営を心掛けて、文化の重要性を国民に再認識していただくよう目指していただきたい。寄付金等による外部資金の獲得は目標を上回っている。

坂本委員	B	博物館平常展の料金改定は理解できないわけではないが、本来はその分、サービスや展示成果の充実・向上を「見える化」して説明するべきである。たとえば、学生は無料にするなどの次世代育成策とセットで料金改定をするといった、国民の理解を得るための工夫がもっと欲しかった。
名児耶委員	B	予算確保はいつも難しいが、博物館や研究所が国民にとってもっと身近な存在であることを周知させる広報活動などにより、一般からも広く寄付を得やすい状況ができればよいと思う。
寺崎委員	B	—

Ⅳ 予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	収支計画、資金計画は、当初予定の範囲内で行われ、相応の成果を上げたものと評価したい。 博物館・研究所等に期待される事業計画の実施に当たっては、その継続性・安定性が、そこに、求められるべきである。しかし、現在の経常人件費を見れば、常勤職員3に対して有期雇用職員1の割合になっている。限られた予算であろうが、今後とも、有期雇用者の雇用比率を下げ、有期職員の常勤職員化を進めるための努力が（引き続き）必要であると考え。
小笠原委員	B	年度内には不測の事態もあったようであるが、年間を通じて、安定的な収支実績を残した。
坂本委員	B	法人全体としての資金繰り対応が行われたとのことで、管理は適切に行われていると考える。
名児耶委員	B	ギリギリの予算の中で、頑張っていると思われる。少しずつ余裕を持てる予算にする良い方法があると良いと思う。
寺崎委員	B	—

Ⅴ その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
河合委員長	B	引き続き、職員の意識並びに資質の向上に関しては、実施される各種研修を通して図られたい。情報セキュリティ対策、働き方改革関連法の施行に対応した研修の企画・立案、適材適所の考えに基づく人員配置等に関しては、必要な改善の課題として引き続き取り組んで欲しい。
小笠原委員	B	コロナ禍においても各種委員会や内部監査など、業務効率性、法連遵守、財産保全に必要な活動をしっかり実施されていると評価する。また人事に関しても多様性を企図した各種活動や配慮がなされたものと思料する。
坂本委員	B	今回は博物館でのクラスターという事態には至っていないようだが、パンデミックもひとつのリスクとして位置づけて検討していただきたい。
名児耶委員	B	リスク管理、情報セキュリティシステムの管理等の対策を評価するが、昨年も述べたが、もっと開かれた施設として認知される努力も必要かと思われる。
寺崎委員	B	—

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）	
河合委員長	当機構の各機関は、元来、コロナ禍の制約や影響は、ほとんど受けない性格の施設（研究・教育機関）であるはずであり、自己点検評価書を見ても、博物館部会のそれに比して、研究所・センター部会の成果には大きな影響を受けることが比較的少なかったように窺われた。確かに不特定多数の人々が集まる可能性の高い博物館に制限がかけられ、相応のリスクも想定されるのは否めない。一方、不要不急の外出を控える対象のうちに博物館・美術館が、その検討が必ずしも十分になされないままに含まれ

	たことに対しては、個人的な印象ながら、遺憾ながら行政当局に負の評価が与えられよう。こうした中で、自己点検評価を行うことには機構にとっても相応の困難のあったことと理解する。なお他に加えれば、文化財活用センターおよびアジア太平洋無形文化遺産研究センターの目指すところおよび機構内に設立されたことの意義など、その性格付け等について、小職には必ずしも十分に承知出来ない恨みが残った。
小笠原委員	私から2点。当機構だけで成し得るものではないですが、1つは、昨年同様、これら自己点検評価作業のより簡素化を進め、研究や研修、展示といった本活動にできるだけ精力を注いでいただきたい、もう1点は、部会の先生が書かれていたが、こうした将来世代に引き継ぐべき歴史・文化の活動にもっと予算を図るような活動を国家のために行っていただきたい。
坂本委員	不要不急という言葉によって博物館が扉を閉ざすのは、国民にとって残念な出来事であった。とりわけ5月の緊急事態再延長にあたっては、国と東京都の認識が異なり、来場希望者を戸惑わせた。残念がる一般来館者の声も多かったのではないか。文化は人々を力づける役割を担っていることを、機構としても強くアピールすることを期待したい。
名兎耶委員	研究活度の成果を展示等で公開するなどの活動がかんじられるが、こうした普及につながる活動さらに期待する。 また何度も述べるが、活動の幅が広く、職員がギリギリの状態に対応しているように感じられる。もっと人員、予算に余裕があるよう状況で、運営されることで、より一般人に共感をよぶ活動が生まれるのではないかと考える。
寺崎委員	2年間、書面審査になったことも関係があるのか、総会の評価に部会長以外の部会委員が関与できていない現状について、なかなか改善方法が示されていないようである。今後、コロナが治まった場合の総会の開催方法・参加メンバーなどを、是非、検討してもらいたい。かりに書面審査が次年度も継続するようならば、次のような案は如何であろうか。全ての委員に資料を送付の上、同一書式での評価を義務づけなくとも、自由記述で意見を求めるといった簡便な方法もあるのではないか。一考を願う。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和2年度－

博物館部会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価書（博物館部会）まとめ

自己点検評価 B 委員評価 B

1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信		
(1) 有形文化財の収集・保管、次代への継承		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 部会長	B	購入品、寄託品は、着実に増加、毎年少しずつでも収集していることが評価できる。修理、保存活動にも成果を上げていると認められる。
浜田 副部会長	B	コロナ禍においても、堅実に業務が推進され、館員の努力が感じられる。増え続ける保管資料に対して、収蔵スペースと収蔵環境を計画的に確保することは、極めて重要である。引き続き、相応の資料収集のための予算確保とともに、収蔵スペースと収蔵環境の確保に務めていただきたい。
小松委員	B	
榊原委員	B	各館限られた予算の中でよく収集の実を上げたと評価するが、その予算そのものが現状額でよいのか否か、本質的な問題として考えるべきだろう。「我が国を代表する人文系の総合博物館として日本を中心にして広くアジア諸地域等にわたる文化材について収集」をはかる東京国立博物館の収集が重要文化財に指定されている作品とはいえ、これ一点だけとは寂しい限りだ。各館の収集活動を支持し促進するためにも、あえて苦言を呈したい。収集のための予算の増額を求める。今年度もまた長年寄託されていた作品が寄贈購入に至ったようで、現状で購入が無理な作品については寄託をはかるべきだろう
出川委員	B	博物館活動の根幹でもある有形文化財の収集や保存、修理等において着実な成果を出されている点が評価できます。

(2) 展覧事業		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 部会長	B	コロナによる様々な影響下においても健闘している。東博「きもの展」や京博「皇室の名宝」等は、日本文化を広く認知させる試みとして良いと思う。
浜田 副部会長	B	新型コロナウイルス感染拡大防止対策により各館とも臨時休館や、入館制限をせざるを得ず、入館者数や収益等に大きな影響をもたらした。そんな中、入館制限されたことが、観覧者にとっては、いつも混んでいる特別展を、ゆっくりと観覧できる機会となったことは皮肉なことかもしれない。
小松委員	B	
榊原委員	B	平常展、特別展ともに入館者数が目標値を大きく下回ったのはコロナの影響で仕方ない。展示の内容そのものはテーマ性のある平常展を企画するなど評価したい。大量動員を図る特別展がコロナ下でどうなるのか。考えていくべきだろう。
出川委員	B	長期にわたって準備されてきた展覧会が中止や延期の判断をされたことは、やむをえませんが、開催された「きもの」展や「桃山 天下人の100年」展、「皇室の名宝」展、「奈良・中宮寺の国宝」展など特筆すべき大変充実した展覧会でした。

(3) 教育・普及活動		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 部会長	B	コロナの影響で、教育、普及活動はより困難な中で、新しい工夫での対応でまずまずの成果をあげていたと判断できる。
浜田 副部会長	B	オンラインを活用した新たな教育事業への取り組みが行われ、新たな成果を挙げていることは喜ばしいことである。コロナ後も引き続き、こうした取り組みが継続されることを期待したい。キャンパス・メンバーズ会員校の立場としては、学芸員養成課程の期待も大きい「博物館学講座」等が中止となり、会員のメリットが減ってしまったことは残念であった。
小松委員	B	
榊原委員	B	新型コロナウイルスの影響下 さまざまな工夫で教育普及活動を展開している点大いに評価する。特に学校教育との連携を図った試みは今後とも実施していくべきであろう。
出川委員	B	コロナ禍での来館が困難な中、ウェブサイトからの情報発信が世界的にも重視されるようになり、その期待にできていたと思います。

(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 部会長	A	全体に研究成果の公開と展示活動が充実しはじめていると感じられされ、博物館活動の中心となるべく維持されることが期待したい。
浜田 副部会長	B	コロナ禍においても、工夫しながら、堅実に業務が推進され、館員の努力が感じられる。
小松委員	B	
榊原委員	B	各館外部資金を活用した調査研究を数多く実施している点評価するが、そのメンバーに他館の学芸員や研究者の参加があるか否か、報告書からは判明しない。もし参加が無いのならば今後はそれを図るべきではないか。
出川委員	B	「聖徳太子と法隆寺」展など3年度以降の展覧会に反映されるであろう調査・研究がコロナ禍においても、着実に学術的な成果を上げている点は高く評価されます。

(5) 国内外の博物館活動への寄与		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
名児耶 部会長	B	困難な状況下では海外での活動は難しかったとは思われるが、目標の成果はあげたと思われる。
浜田 副部会長	B	コロナ禍の影響により、博物館や学芸員に対する研修・指導や国際交流が叶わなかったことは残念であるが、コロナ後を見据えた研修や交流の体系化が図られることを期待したい。
小松委員	B	
榊原委員	B	毎年同じことを要望する。地方への出前展の充実を願いたい。地方在住の者が美術史上の優品を直接眼にする機会はあるようで実は余りない。作品は実際に自らの眼で見るにこしたことはないはずで、地方の人間がそんな機会を得たいと願うのは当然だろう。出前展の活発化を切に希望する。
出川委員	B	

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）	
名児耶 部会長	稀に見る困難な状況下にもかかわらず、調査研究とその成果を展示と結びつける活動などで健闘していたと思われる。特別展も重要ではあるが、通常の文化財の研究とその成果をひろく知らしめること、通常展が基本的重要な活動であることを考えさせられた一年であったと思う。
浜田 副部会長	コロナ禍に明け暮れた令和２年度は、国立博物館に限らず、すべての博物館において休館や開館制限が行われ、厳しい運営を強いられる１年となった。１日も早いコロナ禍の収束を願うばかりである。本来ならば、東京オリンピックが開催され、外国人観光客や国内旅行者を迎え入れ、博物館利用者も大きく増えるはずであった、しかし、オリンピックの開催延期とともに、緊急事態宣言が発出されるなどの影響により、博物館利用者が大幅に減少したことは残念であった。 一方で、こうした状況だからこそ、博物館を訪れて心の安らぎを得たいと考える国民が多いこともわかり、博物館は決して不要不急の施設ではないことが示されたようにも思う。博物館は、国民生活に欠くことのできない施設であることを認識し、コロナ後の運営に全力が尽くされることを期待したい。
小松委員	各施設の活動報告を熟読したが、新型コロナウイルス蔓延の状況下において、さまざまな困難に直面するなか、いずれの施設においても精一杯の活動をおこない、また、展示施設としての役割を果たそうと努力してきたところが読み取れた。各施設に勤務されるさまざまな部署の職員の方々の尽力に敬意を表したいと思う。 従来、文化財機構に属する各展示施設では、メディアと連携して大規模な展覧会を開催し、多数の入場者を集める、といった業態がごく普通におこなわれてきたわけだが、昨年冬以来の感染症の蔓延を受けて、そういった運営の方法も大きな変容を求められているように思う。もし仮に今回の感染症蔓延が終熄したとしても、以前のような業態に戻れるのかどうか、また、戻っていいのかどうか、いまはその方向性を決める大事な時期であると考え。各施設の活動報告をみると、展示施設本来の原点に立ち返って、より地道な活動に力点をおこうとする試みも多くおこなわれているようだが、来年度以降もそのような活動を継続していくなかで、文化財機構に属する各展示施設の新たな方向性を見いだしていけるといいと思う。 各施設に勤務される職員の方々のさらなる奮起を期待する次第である。
榊原委員	新型コロナウイルスの影響で、そもそも人が集まることを前提とする展覧会活動がどうなるのか。大量動員を図る特別展の開催を可能にさせるにはどうするのか。展覧会活動の先頭をいく国立博物館四館の模索と試みに注目する。
出川委員	国立文化財機構の各館とも中期目標の年度計画を十分に達成されていると思います。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会評価報告書

－令和2年度－

研究所・センター部会

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

自己点検評価 A 委員評価 B

2. 文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施		
(1) 新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	所期の目的を達成していると評価され、「B」評価は妥当である。 新型コロナウイルスが無形文化遺産に与える影響を調査した東文研の取り組みは、適時性という点で高く評価したい。
斎藤 副部会長	B	
児島委員	A	新型コロナウイルスの感染拡大状況を見通せず、行動が制限されるなかで、海外との交流には影響を受けたものの多くの研究、調査、発掘等を遂行できたことは十分な成果と言える。コロナ禍の影響を取りまとめて記録に残したことも将来のパンデミックに備える上で重要である。デジタルアーカイブを充実させ、絵入り版本などをオンラインで公開したことはこうした状況下で社会貢献度が高いと判断した。
寺田委員	B	無形文化財の保存や継承は、人と人との対面的な交流を基盤として成り立っている部分が大きいため、有形文化財の場合と比べ、新型コロナウイルス感染拡大の影響がより深刻であると考えられる。この点で、無形文化財に関するプロジェクト（2121E および 2122E）において、コロナの影響に関する情報収集、発信が積極的に行われたことは高く評価できる。報告書などに集約された現場の声とその分析は、今後の対策を考える上でも重要な基礎資料となる。
柳林委員	A	この小項目は、基礎的な調査研究や発掘調査といった両研究所にとって、もっとも基本的に取り組むべき重要な事業で、両研究所の設立の原点ともいえるべき内容と思う。ここではその中からピックアップして評価するが、全体として見ると、少ない人員と漸減する運営費交付金の中で、極めて多方面にわたって深くまで取り組んでおり、小項目の2年度自己点検評価が「B」というのは奥ゆかしすぎる。私は「A」の評価を与えたい。一見、ルーティーンに思える事業であるが、それを続けて着実に成果を積み上げていく努力は大変なものであり、「所期の目標を上回る成果が得られている」と判断するからだ。 昨年から今年にかけて新型コロナウイルス感染症は一向に衰えを見せていない。令和2年度はまさにコロナ禍に襲われた1年だったといえる。21年度に入ってワクチン接種が始まっても収束のめどは立っていない。大変な時期である。 そんな中、コロナ禍と文化財、とくに人が支え、伝えてきた無形民俗文化財とコロナとのかかわりがクローズアップされている。伝統芸能は中止や延期を余儀なくされ、伝承活動も感染拡大の恐れがあるとして思うようにできていない。 ・東京文化財研究所（東文研）はこのような中、コロナ禍と無形民俗文化財とのかかわりに真正面から向き合い、コロナ禍に翻弄される各地の無形民俗文化財の実態や対策、対応を詳細に調査。フォーラムやオンライン会議なども実施して、「新型コロナ禍の無形民俗文化財」や「フォーラムⅠ『伝統芸能と新型コロナウイルス』」などの有意義な報告書を刊行した。各地の厳しい実情が紹介され、担当者らの悲痛な叫びさえも聞こえる重い内容になっており、大きな資料だ。前向きな対策や対応も数多く紹介されており、明るい未来がうかがえるのがうれしい。 この種の活動や報告書の発行は時機を得た取り組みで、全国の無形民俗文化財にかかわる人々の支えや励み、参考になると確信する。その成果や功績は極めて大きく称賛される。困難な環境下での調査と研究、報告書の刊行の労苦に頭が下がるが、21年度もこの取り組みをさらに発展させ、窮状の打開に役立ってほしい。 ・奈良文化財研究所（奈文研）は今年で発足70年目を迎えた。当初は美術工芸、建造物、歴史の3研究室などで構成。南都諸大寺の調査、研究が大きな柱で、貴重な文化財が守られてきた。近年は発掘調査に力が移っているが、このような経緯を考えると諸大寺の調査や研究の意義は極めて大きく、力を入れなければなら

		ない。 「近畿を中心とする古社寺等所蔵の歴史資料に関する調査研究」では、興福寺や法華寺、金峯山寺など奈良の寺院や京都・仁和寺の書籍資料調査に取り組んだ。調書の作成や写真撮影、さらに「仁和寺史料 目録編4」の刊行など、膨大な史料を長年にわたって継続的に調査し、全容解明に尽くしている。これは寺社の信用を得たからこそその取り組みで、少ない人員での地味な事業だが高く評価したい。 発掘調査でも初期の目標を上回る成果を挙げている。平城宮東方官衙地区は今でいう霞が関のような中央官庁街だが、そこでは最大級の自然石を使った長さ7メートルの立派な排水施設が見つかった。付近では大型建物跡が出土しており、それらからの雨水を集めて東側にある基幹排水路に流したらしい。 一方、藤原宮大極殿院地区では大極殿を囲んだ回廊跡の東側が47メートル分、出土した。東半分の回廊の全体がほぼ確認され、規模や構造が判明した。 これらの発掘調査は古代宮都の変遷を解明するうえで奈文研にとって重要な事業だが、国からの運営費交付金の減額で毎年の発掘調査が継続できない恐れも指摘されている。地道な調査研究が十分継続できる体制を求めたい。
--	--	---

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究		
自己点検評価 A 委員評価 A		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	A	文化財の調査手法・保存技術に関する研究は、国際的にも注目されている分野であるが、今年度も十分な成果をあげたものと判断され、「A」評価は妥当である。
斎藤 副部会長	A	
児島委員	A	「2211E」で触れているセミナーの内容をマニュアル化して web 上で公開するようなことがあれば便利。博物館でのウイルス除去、消毒作業に関する検討は、喫緊の課題であり、これも今後 web 上での具体的な指針の発信を期待する。
寺田委員	A	
柳林委員	A	科学技術を応用した調査研究は今後も大いに発展してほしいし、発展しなければならない。文化財は非破壊調査が当然となっているからだが、機器の開発や購入などには大きな費用がかかり、予算が少ない研究者の労苦は大変と想像する。 ・そんな中で奈文研の「ひかり拓本」に注目したい。自己点検評価報告書31頁に「ひかり拓本」のことが「簡便な機材で碑文等の表面情報を読み取る『ひかり拓本』技術の確立と実践を行った」と極めて簡単に掲載されている。調べると、奈文研のアソシエイトフェローが開発した。東北大学や東京大学との共同研究も進み、東北大ではデータベースも進んでいるという。「ひかり拓本」は簡便に言うと、石碑の表面に刻まれた文字や文様を、光源を変えて撮影し、その写真を合成して文字や文様を浮かび上がらせて判読できる画像にする技術という。使う機材はありふれたものでよく、費用もあまりかからない。画像処理も短時間で済む。スマートフォンでもできるそうで、奈文研のホームページには「現在、だれでも使用できるようにするため、Windows 版のソフトを作成している」とある。 実にすばらしい発明ではないだろうか。震災被害や風化などで貴重な碑文が判読不能な石碑なども各地に多く存在しており、今後の活用は広い。いくつかの新聞に成果が掲載されたようだが、今後の利活用に期待したいし、もっとアピールしていただきたい。31頁のプロジェクトについての年度計画、中期計画の評価はともに「A」でよいと思う。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働		
自己点検評価 A 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	海外との人の往来が制限されたため、研究会などの会議の多くがオンライン方式となり、コロナの影響を強く受けた分野であった。そうした中で、各機関の努力は十分に認められるが、各プロジェクトの評価を積み重ねてゆくと、全体としては「B」評価とすべきであろう。
斎藤 副部会長	A	
児島委員	B	国際間の移動は新型コロナウイルスの感染拡大により大きく制限されたため、影響は無視できない。その中でもオンラインの活用により調査、事業などを進めたことは評価できる。ただしこの細目内の項目の自己評価はBが10件、Aが2件に留まることから、全体評価はBでよいと判断した。
寺田委員	A	ポストコンフリクト地域における無形文化遺産保護は、緊急性は高いが実施が極めて困難な課題である。IRCI によるプロジェクト(2320G)は、この難しい課題への果敢な取り組みとして評価できる。コロナウイルスの感染拡大や現地の不安定な治安状況などにより活動が大きく制限され、成果は現時点では限定的であるが、今後も継続して支援されるべき重要課題である。
柳林委員	B	コロナ禍で対面による会議や渡航による活動などが難しい中、オンラインでの国際会議や研修、セミナー、講演などを東文研、奈文研、アジア太平洋無形文化遺産研究センター(IRCI)は積極的に実施している。中でも、外国の美術館に所蔵されている日本美術品を修復したり、世界各国の文化遺産の保護に大きな役割を果たしたりしている。こういう着実な活動は平和外交にもつながるから、しっかり取り組まなければいけないし、支援しなければならない。 ・奈文研が継続的に進めているカンボジア・西トップ遺跡の中央祠堂解体・再構築事業は極めて順調に進み、かなり建物が組み上ってきている。ここでは日本人の石工が中心になって解体、組み立ての作業を行い、カンボジア人スタッフも参加して彼らが活躍しているのは好ましい。外国人への文化財保存技術の伝達が行われていくのは頼もしく、カンボジア政府からも感謝されている。日本人だけで事業を終えることなく、相手国の技術者や研究者の育成にもつなげるこの試みは真の国際協力といえる。完成が待ち遠しい。 ・東文研でのミャンマー・バガン遺跡でのれんが建造物の保存修復事業の行方が気かりだ。ミャンマーから高く評価されている取り組みだが、軍によるクーデターの影響が今後、どのようにこの協力事業に影響するか見通せない。協働の動きを止めてはいけませんが、安全な調査も必要であり、慎重に対応してほしい。 ・東文研の文化財保護法令シリーズの刊行は地味だが着実に進んでおり、25冊目の英国を刊行したことはすばらしい。翻訳だけでなく、背景に関する詳細な説明も付けており、頼もしい書籍だ。国際的に協力事業を推進する中で、現地の文化財保護法を知っておくことは極めて大切であり、有効性は実に高く、評価したい。 ・IRCIは依然として少人数と少ない予算で懸命に事業を展開しており、その努力にエールを送りたい。とくに研究職が1人しかいないという体制は早急に改善を求めたい。1346万円の運営費交付金だけという令和3年度事業予算も、ユネスコのカテゴリー2としての役割を果たす機関としては心もとない。このことは以前から指摘されてきたことであり、機構としての適切な対応を望みたい。 コロナ禍で事業実施が大変なようで、卓上調査やオンラインなどになっている。「A」評価が大半な中で継続性が「C」評価なのは何とも悲しい。取り組みが重なる部分もある東文研との協力を最大限に生かして、科研費も得られるようにしていただきたい。国立文化財機構としても、その一員であるIRCIが事業を実施しやすいような環境づくりに力を入れることを望みたい。 ・小項目「文化遺産保護に関する国際協働」には12の個別事業があり、それらの自己点検評価は「A」が2、「B」が10である。それから考えると、小項目の自己点検評価が「A」なのは首をかしげる。「A」のままなら個別事業の自己点検評価の「A」を増やしていただきたいが、私は「B」と判断する。

(4) 文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用		
自己点検評価 A 委員評価 A		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	A	コロナの影響が比較的少ない分野であり、成果としても高く評価できる。「A」評価は妥当である。 奈文研の文化財情報データベースの充実、東文研の売立目録デジタルアーカイブの公開など、顕著な成果と言えよう。
斎藤 副部会長	A	
児島委員	A	「売立目録デジタルアーカイブ」、「文化財動画ライブラリー」、「史的文字データベース連携検索システム」の公開は高く評価できる。美術史家のノート類の展示も、東博との連携として評価できる。
寺田委員	A	
柳林委員	A	東文研、奈文研ともコロナ禍の中で、少ない人員で年報やニュースなどの定期刊行物や研究雑誌、研究報告書、シンポジウムや講演会の冊子など多数の刊行物を出し、情報発信に極めて力を入れている。東文研でとくに修復報告書や調査報告書などの定期刊行物とは別に40冊もの出版物があり、その情報発信力のすごさに感服する。逆に所員にとって負担がかかりすぎないか心配である。 ・東文研の代表的なコレクションになった売立目録のデジタルアーカイブ公開が始まり、研究報告書「売立目録デジタルアーカイブの公開と今後の展望」も刊行された。未開拓分野に意欲的に取り組んだ成果は高く評価される。 売立目録にはその時の美術品の写真などの記録が掲載され、美術品の移動史など極めて重要な履歴を示す。しかし、古くなった売立目録も多数あり、アーカイブ化で原本の保存に役立ち、多くの人に見てもらえる機会を作ることができた。4年かけたデジタル化の労苦と尽力に敬意を表したい。 美術品の売買は世界で数多く行われている。時には美術品の散逸につながるだけに、売立目録の収集と研究は行方不明の美術品の捜索に役立つ。現に大手百貨店で催された売買での出品物がかなり行方不明になっていることが今回の成果でわかる。他の機関ともいっそう協力して売立目録を収集し、不明文化財の捜索に利用していただきたい。また、売立目録をデジタル化してほしい。 木谷恭介著の推理小説「大和いにしえ紀行殺人模様」では、売立目録が小説の流れで大きな役割を果たしている。そんなことを思い出して、取り組みのさらなる広がりや東文研の所内からの利用に限定されている方法などの改善も期待したい。 ・奈文研の3つの施設で行われた展示公開は、コロナ禍の中で大変工夫され、発掘成果と現代を結びつける内容でそれなりの人々を集めた。 平城宮跡資料館は「疫病退散」をテーマに特別企画展と夏期企画展を実施。64日間で約7,000人が入館した。時機に合ったテーマで、古代の人々がどうやって疫病退散の祈りをささげたかを遺物などで紹介して共感を得た。YouTubeの「なぶんけんチャンネル」にも配信され、考古学を身近なものにしている。飛鳥資料館でも飛鳥地方の珍しい石造物にスポットライトを当てるとともに、近年の石工の仕事や道具などを紹介して人気を呼んだ。

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等		
自己点検評価 B 委員評価 B		
委員名	委員評価	コメント
寺崎 部会長	B	地方公共団体への指導・研修なども、コロナのために中止・減少が目立ったものの、オンライン等により、所期の目的は達成したと認められ、「B」評価を妥当とする。
斎藤 副部会長	B	

児島委員	B	新型コロナウイルスに限らず、今後もこうした感染爆発が起こりうると言われていることから、報告書にも書かれているとおり、感染予防対策に対する継続的な研究、対応が必要であろう。
寺田委員	B	
柳林委員	B	この小項目は、東文研と奈文研がナショナルセンターとしての役割を果たすうえで、もっとも力を入れるべき分野かもしれない。もちろん（２）や（３）も重要ではあるが、やはり地方自治体の人材育成や文化財の研究、保護、管理などで指導したり助言したりすることの意義は計り知れない。それだけの実績や経験を積んできた研究者や職員が両研究所にはたくさんそろっている。 しかし、コロナ禍でこの１年は想定もしなかった事態に巻き込まれた。そんな中でも両研究所はその役割を自覚し、十分に果たしてきたことが評価報告書からうかがえる。地方自治体は両研究所を頼っているのだ。 すべてのことを取り上げることはできないが、たとえば文化庁や地方自治体への助言、生物被害などに数多く対応し、研修もコロナ禍で対面での実施が困難を極める中で、オンラインや動画配信など工夫を凝らして対応した。東文研は生物被害で試料をおくってもらい、解析して助言する新しい方法も採用して応えた。 両研究所は各自自治体の専門委員会に委員として出て助言したのも適切な対応であり、文化財の調査、研究や保護にとって大きな力になっている。とくに火災で全焼した沖縄・首里城の再建にあたっては、必要な地下遺構の保存について迅速な調査と的確な助言をしたことは称賛されよう。地元自治体の関係者らにとって大きな支えになり、再建への道筋を力強くバックアップするだろう。 ・文化財防災センターは昨年秋に奈文研に開設された。早くも博物館や美術館、あるいは文化財保護施設を有する寺社などからの保存環境や管理での問い合わせがあるが、それにも適切な指導や助言で行い、ときにはコロナ禍の中でも感染対策に万全を期して現地調査も実施し、相談者の求めに応じている。高い評価で今後さらに期待したい。ただ、昨年１０月１日に奈文研で行われた開所式の案内がなかったのが残念だ。奈文研の新庁舎オープンの際は案内をいただいた。文化財防災センターの役割を当日、現場で知っておきたかったと思ったからである。

その他（総合的な事項、自己点検評価について等）		
寺崎 部会長		・各機関ともに限られた予算・人員とコロナ禍という制約の中で、工夫を凝らしていることがうかがえるが、コロナ禍の影響が予想外に大きく、そのために評価を下す判断基準が難しかった。 ・人の往来が大きく制限されたため、出張指導・研究集会・企画展示などに関して、人数や回数を例年と比較しても意味がないとはいえ、減少したことをどの程度評価に反映すべきか。いろいろ考えた結果、コロナの影響が強く及んだ分野と、それほどでもない分野が出てしまうのはやむを得ないと判断し、前年度よりはやや厳しい評価となった。 ・逆にこうした１年であれば、この間に研究員諸氏の個人研究がより活発になされたであろうから、その成果が今後、形になってゆくことを期待したい。その意味では、昨年創刊された『奈文研論叢』も偶々であろうが、時宜を得たものとなった。 ・昨年に引き続き、外部評価委員が書類のみで判断することとなったため、各機関の担当者による発表を直接聞くことができず、隔靴搔痒の観があることも事実である。コロナの早期の終息を願うばかりである。
斎藤 副部会長		インターネット動画などを利用した外部発信は時宜にかなっている上に、今後も有効な手段となりますので、それぞれの研究内容をアピールするために、大いに活用していただきたいと思います。 令和２年度はCOVID-19のため、現地調査や講演会、シンポジウムなどに対する影響はかなり大きかったと思われますが、それぞれの事業で具体的にどのような対策をとったのか、記述がまちまちでよく読み取れないところがありました。機関としてどのような方針で臨んだのか、調査や講演を実施する地域に応じてどう対処したのか、延期あるいは中止にしたのか、過去に収集した資料に基づいた調査を行ったのか、などを記していただければ、報告書としてさらにわかりやすくなったと思います。もし、そのために、実際に行われた事業の内容が当初計画からの変更を余儀なくされてしまっていたとしても、それは不可抗力であり、やむを得ないことであると判断いたします。したがって、それをもってマイナス評価とすべきではないと考えます。

児島委員	コロナ禍の中でナショナルセンターとしての指導的役割を果たすことには困難があったと想像されるが、多くの事業が達成された。人々の移動が制限されコミュニケーション手段のオンライン化が進む中で、デジタルアーカイブや動画の作成・公開が果たした役割は大きい。特に研究所に保管されてきた「売立目録」や田中一松資料などは「埋蔵資源」とも言うべきものであり、それらのデジタル化、公開は意義深い。今後もこうした事業が継続されることを期待する。
寺田委員	新型コロナウイルスの感染拡大により通常の活動が大幅に制限されるなか、各機関がオンライン技術などを活用し、創意工夫の結果として当初の目的を十分に達成することができたことは喜ばしい。また、感染拡大が文化遺産保護へ及ぼした影響についての聞き取り調査、議論を積極的に行ったことも高く評価できる。令和2年度は、対面活動の代替メディアとして利用されたオンライン技術が、調査や成果公開などを進める上で一定の利点を有することが認識された期間でもあった。オンラインを通じて会議、講演、研修などを行う過程において、内容や目的に沿った知識・経験が蓄積されているはずであり、これらの蓄積をパンデミック収束後にも有効に活用してほしい。
柳林委員	今回も書面審査になり、2年続きで機構本部や研究所などの方々とお会いして事業活動の説明を受ける機会がなかったことを残念に思っています。コロナ禍だからいかんともしがたいのは事実ですが、国の委員会でも感染対策をしたうえで開催しているケースもあり、来年はぜひ対面での質疑応答ができる外部評価委員会にしていきたいと思います。とくにコロナ禍での労苦や工夫をうかがうことで、今後に再び起きるかもしれないこういう惨禍の時の対応を考え、学び、心得て置く機会にしたいからです。 そういう意味では、コロナ禍で極めて大きな影響を受けた博物館の関係者も出席する外部評価委員会総会に、研究所・センター調査研究等部会員（希望者だけでもいい）が出る機会を与えていただけるような態勢を取っていただけたらうれしいです。現在は両部会長らごく限られた委員が両部会のまとめた評価を報告する場になっていますが、以前は、総会に全員が出させていただき、博物館部会の情報も知ることができました。ご検討いただければ幸いです。 コロナ禍で中期計画（参考3）のいろいろな所で掲げられた「前中期目標の期間の実績以上」の成果を求める目標が、今回はクリアできていないのがおおいでしょう。これをどうするか、判断が難しいでしょうが、ご検討をよろしくお願いします。

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会

委員長	河 合 正 朝	(慶應義塾大学名誉教授)
委員	小笠原 直	(監査法人アヴァンティア法人代表 代表社員 公認会計士)
委員	児 島 薫	(実践女子大学文学部美学美術史学科教授)
委員	小 松 大 秀	(公益財団法人永青文庫館長)
委員	齋 藤 努	(国立歴史民俗博物館研究部教授)
委員	榊 原 悟	(岡崎市美術博物館特任館長)
委員	坂 本 弘 子	(朝日新聞社常勤監査役)
委員	出 川 哲 朗	(大阪市立東洋陶磁美術館長)
委員	寺 崎 保 広	(奈良大学文学部名誉教授)
委員	寺 田 吉 孝	(国立民族学博物館名誉教授)
委員	名児耶 明	(元公益財団法人五島美術館副館長)
委員	浜 田 弘 明	(桜美林大学教授)
委員	柳 林 修	(読売新聞社「寺社プロジェクト」アドバイザー、 元読売新聞編集委員)

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 博物館部会

部会長 名児耶 明 (元公益財団法人五島美術館副館長)

副部会長 浜 田 弘 明 (桜美林大学教授)

委員 小 松 大 秀 (公益財団法人永青文庫館長)

委員 榊 原 悟 (岡崎市美術博物館特任館長)

委員 出 川 哲 朗 (大阪市立東洋陶磁美術館館長)

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会 研究所・センター部会

部会長 寺 崎 保 広 (奈良大学文学部名誉教授)

副部会長 寺 田 吉 孝 (国立民族学博物館名誉教授)

委員 児 島 薫 (実践女子大学文学部美学美術史学科教授)

委員 齋 藤 努 (国立歴史民俗博物館研究部教授)

委員 柳 林 修 (読売新聞社「寺社プロジェクト」アドバイザー、
元読売新聞編集委員)